

国内ロングステイの動向

ロングステイ財団「ロングステイ調査統計2018」から

ロングステイ財団(田川博己会長)は、日本人の長期滞在型余暇の現状とトレンドについて客観的に分析し、ロングステイに関する提言を行う出版物「ロングステイ調査統計2018」を6日に発行した。ここでは、その中から「ロングステイの動向と分析」の「国内ロングステイ」を抜粋して紹介する。

図1 国内旅行でロングステイが目的と回答した実施都道府県トップ10(経験別)

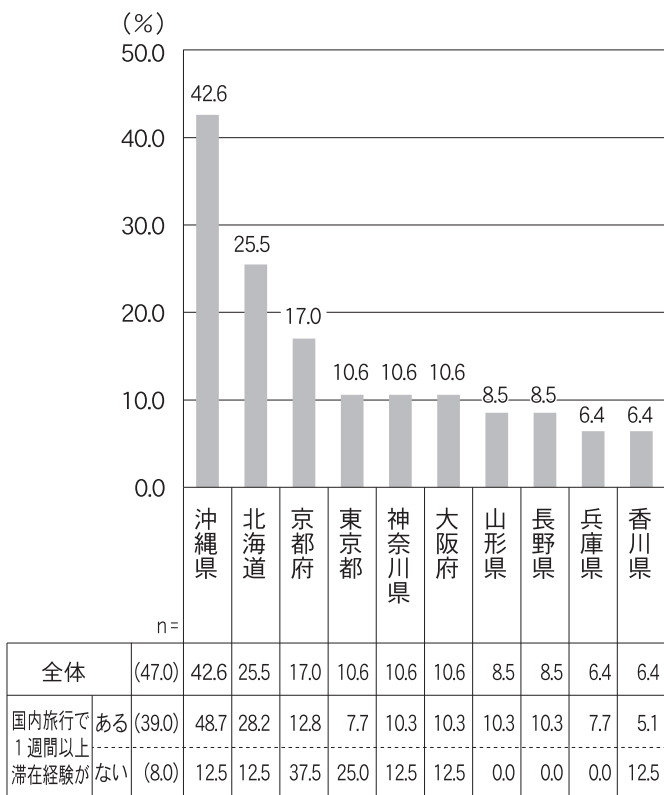


図2 国内ロングステイをする場合、希望する都道府県トップ10(経験別)

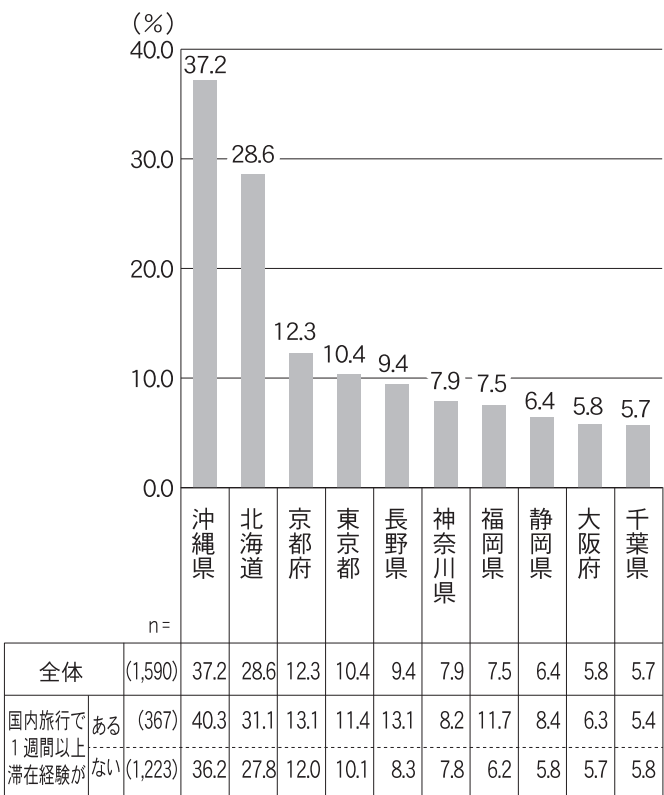


図3 国内ロングステイの決定基準(経験別)

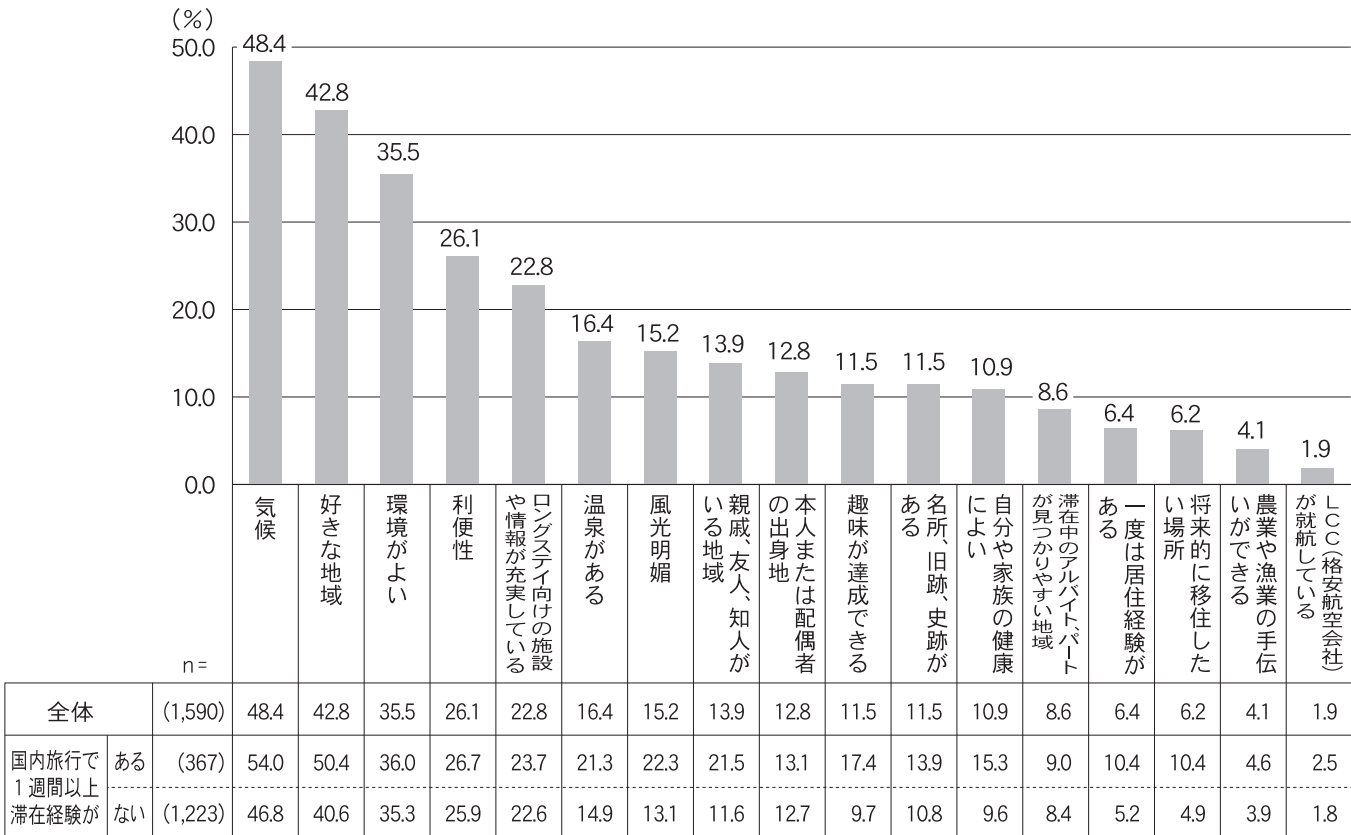


図4 ロングステイを始めた目的、過ごし方(国内ロングステイ経験別)

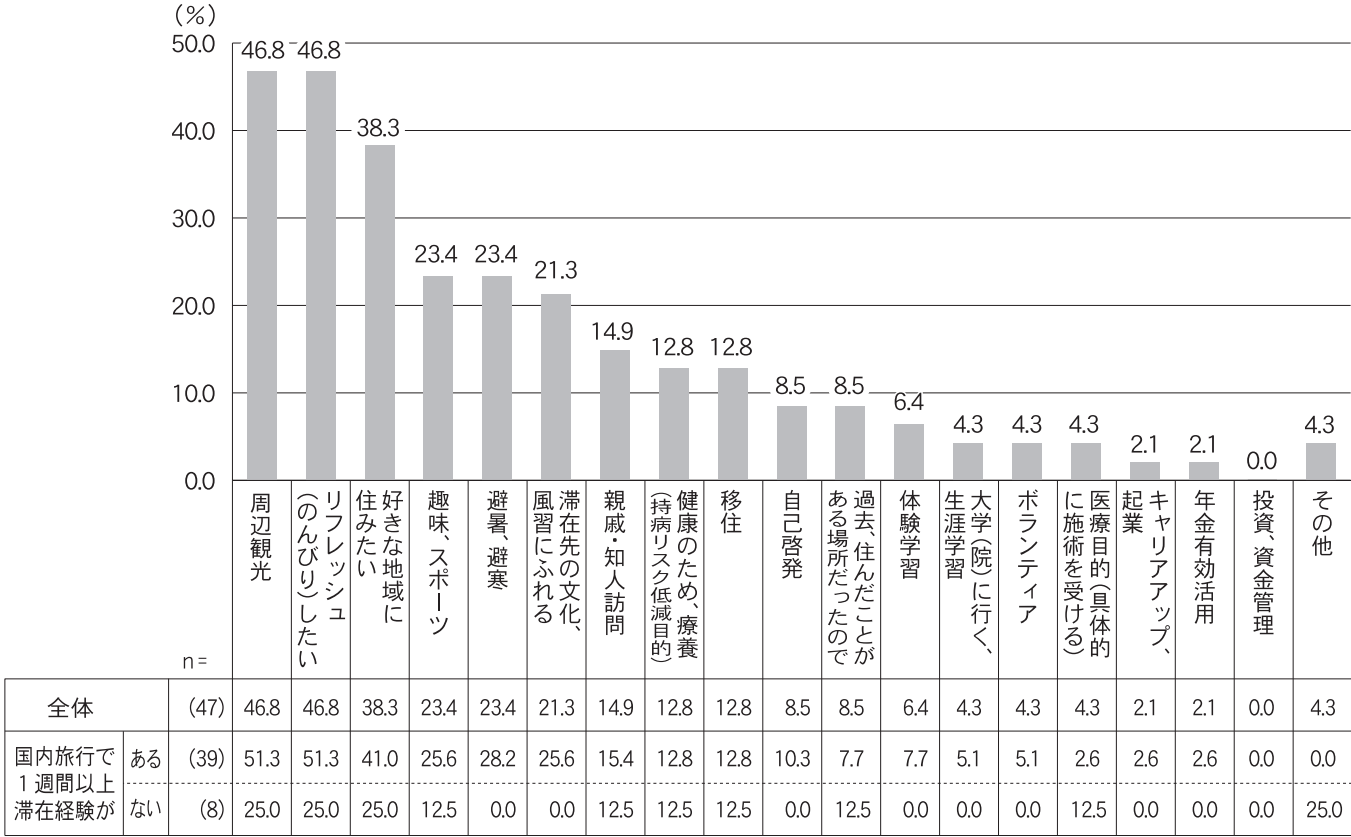


図6 ロングステイの障害(不特定多数全体)

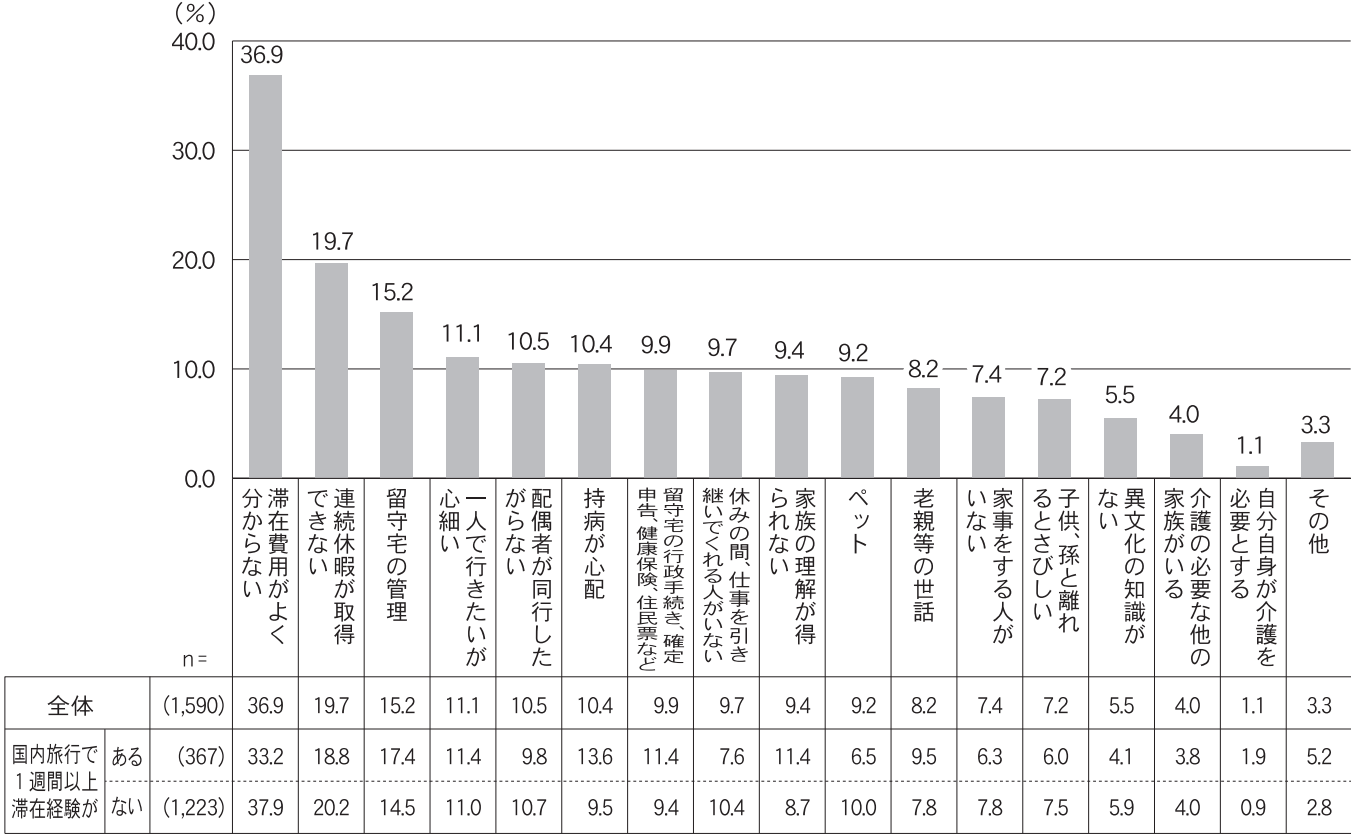


図1は、国内旅行でロングステイを目的として実施した方々の選んだ希望地域トップ10、図2は、不特定多数全体の方々に選んだ希望地域トップ10である。ロングステイを目的とした回答者は、国内旅行経験者全体1590人の約37%、昨年(17年)は37.2%の47人(昨年は60人)であった。その47人が選んだ順位は、図1の通りである。トップ3は、1位中部圏、2位北海道、3位京都府(昨年2位)、4位東京都、5位神奈川県、6位大阪府(昨年11位)、7位山形県(昨年41位)、10位香川県(昨年26位)と山形県、香川県は大きく躍進した。

一方、不特定多数全体(1590人)が選んだ順位は、図2である。このトップ3は図1と同じで、1位中部圏、2位北海道、3位京都府という結果であった。この不特定多数全体トップ10では上位8位までは昨年と同じ順位であったが、9位大阪府(昨年11位)、10位千葉県(昨年12位)は順位を上げていた。

不特定多数全体に尋ねたロングステイ地の選択基準は、図3の通りである。圧倒的に「気候」が支持されている。気候の良さを重視する世代は60代後半の男性、50代の女性であった。また、好感度を重視する世代は男性、女性とも20代、30代であった。

また、国内で1週間以上滞在(ロングステイ)の経験者に絞り込むと、「気候」「好きな地域」を支持するポイントが平均よりも大きく上昇する。温暖で過ごしやすいく気候と好感度が高い条件は、必要絶対条件といえる。さらに「将来的に移住したい場所」と回答した経験者は10.4%と、10人1人は移住に備えてロングステイをしている実態が浮き彫りになった。

整備が遅れていることが浮き彫りになっている。当財団としても情報整備の重要性を再認識し、高い優先度で取り組みたい。また、昨年同様であるが二つの外的障害要因が見える。

一つは職場環境・働き方(休み、普及啓発支援の取組も開始した。今後は、関係組織との連携を拡大、深化させ、提唱レベルでなく、企業に対する先行事例の紹介や課題解決型提案を提言強化を行っていくこと。

図7は「現地のどのような情報が必要だったか」の結果である。昨年と比べて大きく増加したものは、「推奨レストラン」など飲食店の情報、「交通情報」「地域の習慣・風習」に関する情報、3点であった。地元ならではの食文化に対する関心度が大きく伸びたのは、その地域の固有文化への関心の高まりであり、新しい発見を求める傾向が強いということを示唆している。次いで、「交通情報」であるが、現地の二次交通、目的地までの公共交通機関に関する情報が重要である証である。さらに、「地域の習慣・風習」に関する情報に、大きな伸びも先ほどの食文化同様に、新しい発見や学びの効果が表れていることが読み取れる。旅をより長期化させる3大要因は「新しい発見・冒険・学び、そして教養である。これらのテーマに沿った、その地域ならではの時間消費、空間提供が人を引きつける素材になることが読み取れる。

図5 ロングステイを始めた目的、過ごし方(不特定多数全体)

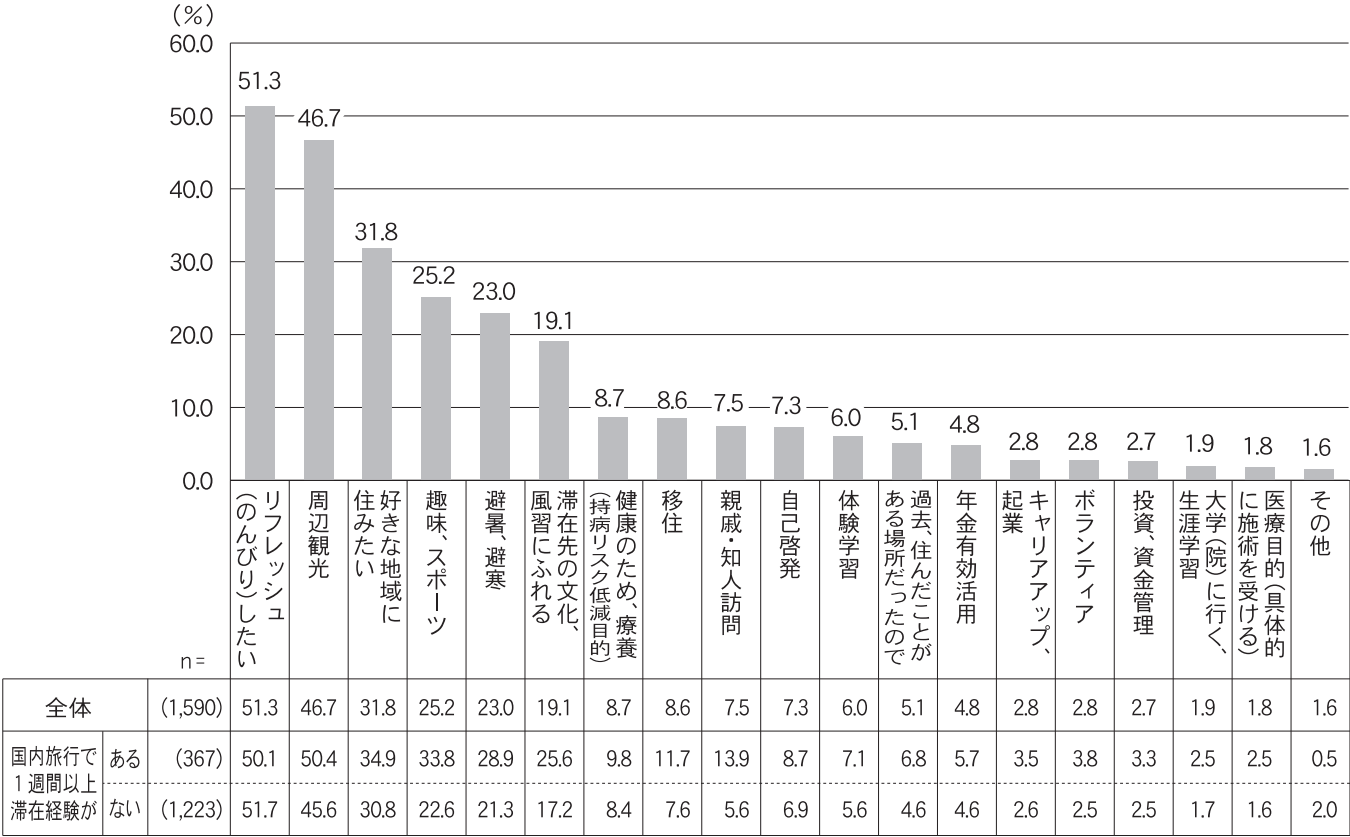


図7 現地のどのような情報が必要だったか(国内ロングステイ経験者)

